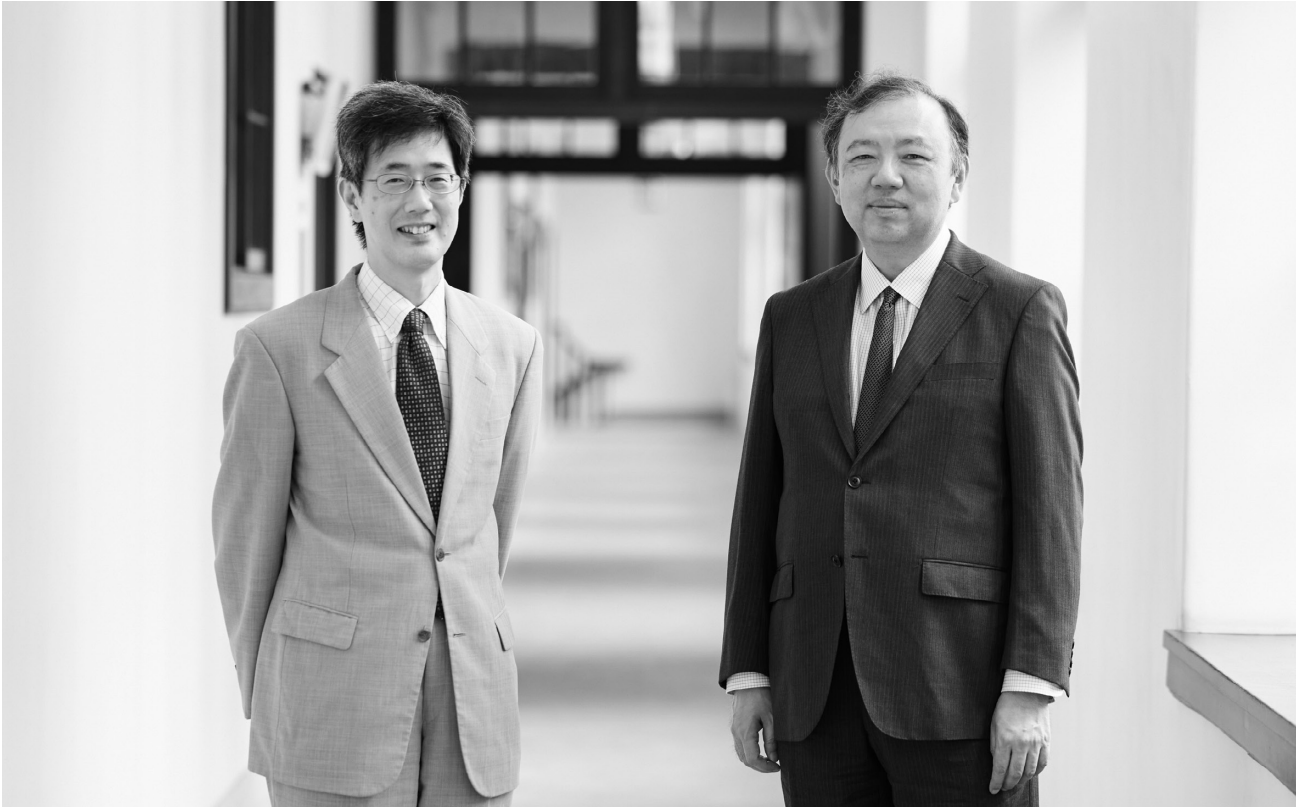


2023.6.23

立教大学全学共通
カリキュラム運営センター

新旧全カリ部長（左：浅妻章如、右：井川充雄）



全カリ部長就任の挨拶

全学共通カリキュラム運営センター部長（2023年度～）／法学部教授 浅妻 章如

2023年4月に全学共通カリキュラム運営センター（以下、全カリ）の部長を拝命した浅妻章如と申します。どうぞよろしく申し上げます。

2018～19年度に水上徹男部長及び井川充雄部長の下で全カリ副部長を務め、2020年度も継続する予定でしたが、2020年度に法学部の事情により学科長として呼び戻されました。代わりに命ぜられた飯島寛之全カリ副部長にとっては寝耳に水のことであったとお察しします。すみません。なお、法学部での学科長職は当初1年間の予定でしたが、やはり法学部の事情により1年間延長されました。そういった事情もあって、西原廉太総長からお電話を頂いた際に「全カリ副部長として呼び戻されるのかもしれない」とは覚悟しておりましたところ、部長の要請であるとは思っていなかったので多少面食らいました。

1991年7月の大学設置基準の大綱化を受けて1991年10月に全学カリキュラム検討委員会が発足し、1995年3月に一般教育部が廃止され、1995年4月より全学共通カリキュラム運営センターによる一般教育課程運営が開始された（全学共通カリキュラム全面実施は1997年4月から）と伺っていますが、私が立教大

法学部に着任したのは2004年4月でしたので、発足当初のことは存じておりません。発足当時は新座に学部はなかったと伺っています。新座に学部がなかった時代といえ、全学共通科目総合系科目の一つ（多彩な学び「現代社会における言葉の持つ意味」）を担っていただいている古舘伊知郎客員教授から立教高校時代の思い出を拝聴する機会があったことは、全カリ部長の役得の一つでした。

その後、学部は増えていき、2023年4月からはスポーツウエルネス学部が開設され、11学部となりました。そうなりますと、全カリで扱う科目の数も膨大になっていきます。2023年度の開講コマ数は、言語系2,673コマ、総合系751コマです。職員、教員の皆さまのご協力抜きでは到底提供できない数です。これからもご協力よろしくお願いします。

立教大学の学士課程の教育目的は、「教養ある専門人の育成」から「専門性に立つ教養人の育成」に変わりました。改めて、この変化は素晴らしいものであると感じます。私が学部で教えている専門科目は「租税法」という科目ですが、実務における租税法の学問的レベルは学生時代の私が学習した内容より遥かに高度なものとなっており、大学レベルで教えたり学んだりできる内容と実務レベルとの乖離は広がる一方です。司法試験においてすら、出題範囲を国税通則法・所得税法・法人税法の3つに絞り、実務的な関心が高まっている国際租税法等は削るという形で手加減しなければならない（出題範囲内でも相当に手加減しなければならない）、というくらいに乖離は広がっています。国によっては大学法学部を卒業すると法曹資格を取得できるところもあるようですが、大学（又は法科大学院）レベルで実務に通用する教育を施すことは諦めざるを得ません。しかも租税法は法改正が多い方の分野です。憲法のように法改正自体は少ない分野もありますが、判例等は毎年積み上がる一方です。そもそも、立教大学法学部を卒業して法曹を目指す者もいるにはいますが、数としてはマイノリティです。恐らく、大学レベルと実務レベルとの乖離という現象は、法学部教員だけでなく多くの教員が感じているところであろうと思います。そういう中で、「専門性に立つ教養人の育成」に目的を変えたことは慧眼であったなと感服します。

学部教育と一般教養教育との関係に関わる私自身の思い出としては、学部における1年次の法律系の入門科目はつまらないと感じていました。しかし、2年次から学部における民法、刑法、憲法といった専門的な講義が始まると、俄然、法律って面白いと感じ、こんなに面白いのだったら1年次から入門科目とかいう回り道をしないでほしかったと感じました（これはあくまで私自身の感想であり、友人に話すと「いや、入門は面白かったよ、君が受けた入門科目の教員がたまたま外れだったのでは？」という反応を受けることもありました。他方で、法律の専門科目については砂を噛むような感じでつまらないと感じる人も少なくありません。向き不向きがあることは否めないようです）。こうした学部教育の入門科目に対する悪印象と比べ、一般教養科目については悪印象がありません。FORTRAN（当時ですら父から「そんな古い言語使っているの？」と言われましたが）を使ったプログラミング等が印象に残っています。入門的だからつまらない、という訳ではないのだろうと推測しています。以上の感触も踏まえ、私が総合系科目を担当する際は、入門的ではあっても幾らか先進的で尖った内容を混ぜて楽しんでもらいたいと思っています（むしろ法学部での専門教育の方が尖っていないかもしれません）。恐らくこれを読んでもくださった教員も、全学共通科目を担当する際は、入門的ではあっても何かしら工夫なさっているものと推察します。

総合系科目を通覧して感じるのは、筆記試験の比重が高い科目が学生から嫌われている、ということです。このことも見越して「学びの精神」では筆記試験の比重の最低水準を設けたところですが、なかなか学生は筆記試験に慣れないようです。

私自身は英語や国語に苦手意識がありますが、少し年をとってから振り返ると、汎用性の高い学習は結局のところ語学（と数学。今ですと統計も加わるでしょうか）だよ、というところに落ち着いてきます。言

語教育に関しては、英語とそれ以外の初習言語の2言語の教育体制を諦めてしまっている大学もありますが、2言語必修の外国語教育体制を維持している本学の努力はこれからも続いてほしいなと願うところです。

現在全カリは、2024年度からの言語B新カリキュラムと2028年度からの言語Aカリキュラム改革という課題を抱えております。外国語教育研究センターと学部の協力を得て、進めてまいりたいと思います。

語学と教養との融合として特記すべきことが2点あります。F科目と副専攻です。

吉岡知哉総長時代に採択されたスーパーグローバル大学創成支援事業のために英語で講義する科目の創設が急務となり、F科目（外国語による総合系科目）の増設の検討が始まりました。検討していた当時は、英語で講義する科目を作っても学生にそっぽを向かれて閑古鳥が鳴いてしまうのではないかと、いうことを最も懸念していました。かといって必修化するとしたら大量に卒業不可学生が出るであろうという懸念と板挟みでした。しかし、蓋を開けてみると、F科目（特に初習者向けの「導入」）の充足率は高く、むしろ増設をしなければならない程であり、閑古鳥懸念が良い方向に裏切られました。

もう一つの目玉のグローバル教養副専攻の方は、あいにく登録者数・修了者数が伸び悩んでおります。海外体験必須であるところ、コロナ禍で海外体験自体が難しかったという不幸がありました。海外体験が復活しつつありますので改めて学生へのアピールを考えているところです。



教育改革の場としての“全カリ”

全学共通カリキュラム運営センター部長（2019～2022年度）
／社会学部教授 井川 充雄

はじめに

私は、2019年4月から2023年3月までの4年間、全学共通カリキュラム運営センター（以下、全カリ）部長を務めさせていただいた。4年前に全カリ部長になった際に、本誌『全カリニュースレター』No.46(2019年10月10日発行)に「全カリ部長に就任して」という一文を寄稿している。そこにも記したが、私は立教大学に赴任して以来、全カリ関係の委員などを務めたことがないままに、つまり右も左もわからない状況で全カリ部長に就任した。それが何とか4年間、務めることができたことは多くの方のおかげに他ならない。とりわけ、この間、ともに全カリの運営に当たった全カリコア会議のメンバー、多大なるご指導を頂いた大学執行部の皆さん、部長会で議論を交わした各学部や事務部局等の学部長・研究科委員長・部長の皆さん、そして何よりも、全カリの運営に献身されている全学共通教育事務室（旧・全カリ事務室）をはじめ、各部署の職員の皆さんに厚くお礼を申し上げたい。皆さんとともに仕事をさせていただいたことで、さまざまな困難を乗り越えることができた。

さて、ここに4年間を振り返りつつ、その経験を踏まえ、今後の全カリのあり方について、私見を述べることをお許しいただきたい。

カリキュラムの改革

この4年間に取り組んだことの一つは2024年度から実施される言語系科目における新カリキュラムの策定

と、その円滑な実施に向けての準備である。とりわけ初習言語である言語Bにおいては、これまでの科目構成を大きく転換する方針である。2020年4月に外国語教育研究センターが設置され、そこに着任された先生方が、これまでの立教の言語教育のあり方を踏まえた上で、新たな発想から構想されたものである。また、言語A（英語）においても、2024年度からの自由科目の再編に加え、すでに2028年度実施を目標に新カリキュラムの検討が始まっている。私見だが、いずれは英語の必修そのものを廃止することもあり得ると考えている。

他方、総合系科目においては、全学のグローバル化の方針に沿って、F科目（外国語による総合系科目）の増設を行ってきたが、今後は、履修者を増やす方策を検討する必要がある。聖路加国際大学との合同授業も2022年度から始まったが、こうした他大学との学術交流もカリキュラムの幅を広げてくれるだろう。

また、グローバル教養副専攻については根本的な制度変更を検討する時期にさしかかっている。現在はコースやテーマが多くて複雑なので、整理統合が必要だろう。また、必須としている「海外体験」の扱いが焦点となろう。

カリキュラムは不断に検討していかなければならない。学生にとって魅力的で、社会のニーズを反映する方向で一層の充実化をはかっていくということが重要であろう。

コロナの経験から

全カリ部長に就任した際に、私自身が問題意識として持っていたのは、全カリの組織や制度改革の必要であった。しかし、これにはほとんど手つかずになってしまったことは悔やまれる。その理由は言うまでもなく、2020年初頭からの新型コロナウイルス感染症のまん延である。全カリはもちろん、全学でオンラインへの転換をはかるというのは一大プロジェクトであった。その経緯は、「全カリ・オンライン授業への道」（『全カリニュースレター』No.48、2020年9月14日発行）に記したが、その後も感染状況に応じてさまざまな対応を取ることに追われてしまった。

ただ、コロナの経験から得たものがあるとするれば、オンラインというツールである。当初は緊急避難的な措置であったが、今後はその活用方法を具体的に検討していくことになるだろう。その際、教員の都合といった安易な理由は認めるべきではなく、ましてや教室が不足しているのでオンライン化するというのは本末転倒である。重要なのは、オンラインならでは教育効果があるかどうかということであろう。

全カリとして取り組んだのは、池袋と新座を結んだミックス型授業である。日頃、離れたキャンパス間での交流の場は少ない。また、新座では開講科目が少ないのも事実であり、そうした現状への対応としてミックス型授業を構想した。私自身、そのパイロット授業を担当したが、そうした経験を積み重ねていくことで、よりよい方向性が見いだせるだろう。それについても、「FDプログラム「ミックス型授業の実施報告－全学共通科目総合系科目『立教人から学ぶメディアの世界』から－」」（『全カリニュースレター』No.54、2022年12月12日発行）に記した通りである。

この発想を拡大していけば、他大学、さらには海外と結んだミックス型授業も可能であろう。立教にはない特色を持つ大学とオンラインで結んだり、内外の第一人者から直接授業を受けられるようになれば、立教の教育の幅は格段に広がるだろう。

教員よっての全カリ

全学共通科目の担当は負担だと思える教員は、残念ながら少なくないのが実情である。ただ、例えば総合系科目で求められているのは、自分の専門に根ざしつつ、学際的な視点からそれを講義するということである。

したがって、ご自身の研究成果を授業に還元し、それを振り返る機会とする一方で、授業をする中で得られた新たな視点を研究に活かしていくという、教育と研究の往還ができれば理想的である。

また、全カリにはコラボレーション科目のような企画提案型科目もある。こうした制度を利用しつつ、専門の授業ではできない新たな内容を展開する場として全カリを捉えて頂ければ幸いである。

全カリの組織のあり方

4年間を通じて痛感したのは、学部の全カリへの関わり方が非常に希薄であるということである。毎年の科目担当者の決定は一定のルールにしたがってルーチン的に行われている。しかし、全カリの運営に関わっている教員はきわめて少数であり、持続可能性において問題があると言わざるをえない。言うまでもなく、全カリには専任教員はいない。「全カリは全学で支える」という理念のもと、学部教員の積極的な関わりがあって初めて、全カリはその役割を十分に果たすことができる。組織のあり方について、検討すべき時期に来ていると思われる。

大学院版の全カリ

話は横道にそれるが、大学院版の全カリを作ったらどうかと考えている。国際学会での発表や論文投稿のための外国語のスキルアップ科目や、研究倫理に関する科目など、研究科を超えて共有できる科目はいくつもあるだろう。そして、何よりも、他の研究科の教員や院生たちと混じって学ぶ経験は、タコツボ化しやすい専門研究を相対化し、新たな可能性を切り開いてくれるものだと思う。それは履修する院生だけではなく、担当する教員にとっても刺激的なものとなるのではないか。ただ、大学院の全カリを作るとしても、まずは近い分野を持つ研究科同士でスタートして、したがって、現在の全カリ運営センターの枠組みとは別の形で運営するのが現実的だろう。

おわりに

「全カリは広場（フォーラム）だ、というのが、わたくしのかねての考え方である。新しいカリキュラムをつくり、それを請け負う機関ではない。また、専門学部の意向のままに予備教育を行う機関でもない。この広場に集まった教職員が、卒業までのカリキュラムの目標と構造と質を決め、全学の合意と協力のもとに形づくってゆく、そのような広場である」というのは、初代全カリ部長を務められた寺崎昌男先生のお言葉である（『大学教育研究フォーラム』創刊号、1996年）。私も、この4年間の経験を通して、この意見に大いに同意するものである。

全カリは、一般教育部の廃止に伴って1995年に設立され、1997年に全面実施された。以来、多くの教員の熱意によって支えられ25年余りが経過した。この間、本学の全カリというシステムは、他大学からも高い評価を得ている。立教大学の教育目標は「専門性に立つ教養人の育成」であるが、リベラルアーツ教育を推進する主体としての全カリの役割は、ますます増大している。

今後も立教大学の教員・学生らが、リベラルアーツの拠点としての全カリという広場に集い、互いに切磋琢磨し、新たな知の地平を切り開いていくことを、切に願っている。

TOPICS

2024年度からの言語教育新カリキュラムに向けたFD等取り組みを開催

2024年度より、英語および言語Bにおいて新カリキュラムが開始することに伴い、各言語教育研究室にて説明会やFDなどが開催されました。1月26日（木）に開催された英語教育研究室のWinter FDセミナーでは、新しい自由科目の内容の説明を、言語Bの各言語教育研究室では、担当者連絡会において新カリキュラムの説明が行われました。ドイツ語教育研究室では9月に引き続き第2回新カリFD研修を2月に開催しています。さらに、3月31日（金）には、初の試みとして、言語B横断のオリエンテーションが開催され、言語B新カリキュラムの概要や複言語複文化主義に関する説明が行われました。



言語B横断オリエンテーション

2023年度よりグローバル教養副専攻に新たなテーマを設置

2023年度より、Disciplineコースに新しいテーマ「Japanese Studies in English Program」が設置されました。

本テーマは、英語による科目のみで修了可能で、テーマに指定されている科目履修を通じて、日本の文化や社会への理解を深め、豊かな語学力・コミュニケーション能力や異文化理解を育み、日本と世界を結ぶ国際性豊かな人材となるための素養を身に付けることを目指します。全ての学部学生が登録可能で、外国人留学生については、「海外」を日本と捉え、日本国内での活動を海外体験の自主企画の認定対象とします。

また、この新しいテーマを追加したグローバル教養副専攻パンフレットが完成しましたので、右記のQRコードからぜひご覧ください。



3年ぶりに「海外言語文化研修」を現地で実施

新型コロナウイルスの関係で中止となっていた「海外言語文化研修」ですが、2022年度は3年ぶりにフランス語およびスペイン語で現地渡航を含む研修を実施しました（英語・ドイツ語・中国語は中止、朝鮮語は2021年度、2022年度ともにオンライン開講）。

「フランス語海外言語文化研修」は2月4日（土）～2月26日（日）にブルゴーニュ大学で行われ、12人の学生が参加しました。また、「スペイン語海外言語文化研修」は2月18日（土）～3月13日（月）にアルカラ＝デ＝エナレス大学附属語学学校で行われ、13人の学生が参加しました。

2023年度は、英語を除く全言語（ドイツ語、フランス語、スペイン語、中国語、朝鮮語）で現地研修を実施する予定です。



フランス語海外言語文化研修



スペイン語海外言語文化研修

2022年度 全学共通カリキュラム運営センターの主な活動

<言語系科目構想・運営チーム>

①英語教育研究室

- ・ 4月5日（金）春学期FDセミナー
- ・ 9月9日（土）秋学期FDセミナー
- ・ 1月26日（木）Winter FDセミナー
- ・ 英語力伸長度測定テスト（TOEIC IP）実施
1年次対象：春学期（プレイスメントテスト）4月1日（金）、秋学期 12月15日（木）～22日（木）
2～4年次対象：春学期 4月23日（土）～27日（水）、6月25日（土）～6月29日（水）、10月22日（土）～10月26日（水）、12月3日（土）～12月7日（水）

②言語B教育研究室合同

- ・ 3月31日（金）言語Bオリエンテーション

③ドイツ語教育研究室

- ・ 9月14日（水）春学期担当者連絡会、第1回新カリFD
- ・ 2月16日（木）秋学期担当者連絡会、第2回新カリFD

④フランス語教育研究室

- ・ 7月1日（金）春学期担当者連絡会
- ・ 12月3日（土）秋学期担当者連絡会

⑤スペイン語教育研究室

- ・ 7月27日（水）春学期担当者連絡会
- ・ 1月28日（土）秋学期担当者連絡会

⑥中国語教育研究室

- ・ 9月10日（土）春学期担当者連絡会
- ・ 2月17日（金）秋学期担当者連絡会

⑦朝鮮語教育研究室

- ・ 8月1日（月）春学期担当者連絡会
- ・ 2月1日（水）秋学期担当者連絡会

⑧諸言語教育研究室

- ・ 7月20日（水）ロシア語担当者連絡会
- ・ 3月14日（月）ロシア語担当者連絡会

<総合系科目構想・運営チーム>

- ・ 4月8日（金）スポーツ実習科目担当者連絡会
- ・ 7月25日（金）2022年度第2回総合系科目担当者連絡会

- ・ 2月27日（月）2023年度第1回総合系科目担当者連絡会
- ・ 9月5日（月）FDプログラム「ミックス型授業の実施報告－全学共通科目 総合系科目『立教人から学ぶメディアの世界』から－」

<授業評価アンケート関連>

【2021年度「学生による授業評価アンケート」関連】

- ・ 2021年度「学生による授業評価アンケート」学部等総評の作成

【2022年度「学生による授業評価アンケート」関連】

- ・ 2022年度「学生による授業評価アンケート」言語系科目実施科目数：春学期664科目、秋学期672科目、計1,336科目
総合系科目実施科目数：春学期206科目、秋学期140科目、計346科目
- ・ 英語必修科目カリキュラムアンケート実施
2023年1月11日（水）～1月23日（月）
- ・ スポーツ実習「授業評価アンケート」実施

<シンポジウム>

テーマ：1年次英語必修科目「英語ディベート」における授業実践とその教育効果について

日 時：2022年12月2日（金）

場 所：ハイブリッド方式（池袋7102教室およびZoom）

プログラム：

1. 「ディベート教育による市民性の涵養」
師岡 淳也 氏（異文化コミュニケーション学部教授）
2. 「次世代の立教英語教育：英語ディベート設立の背景と理念」
三島 雅一 氏（外国語教育研究センター准教授）
3. 「Case report on Debate class」
モック ジェフリー 氏（外国語教育研究センター特任准教授）
4. 質疑応答

*本シンポジウム筆録は「大学教育研究フォーラム」第28号（2023年3月発行）に掲載しています。

2023年度 全学共通カリキュラム運営センター 名簿

2023年6月現在

全カリ委員会				言語教育研究室				総合系科目構想・運営チーム												
役職名	氏名	所属		研究室名		氏名	所属	役職名	氏名	所属		担当								
部長	浅妻 章如	法	国ビ	英語	主任	サンブソン リチャード J.	外C	リーダー	後藤 雅知	文	史									
副部長	飯島 寛之	済	会				新多了	外C	メンバー	秋葉 昌樹	文	教	人文科学系							
チーム リーダー	松本 句子	外C					三島 雅一	外C		寛 三郎	理	数	自然科学系							
	後藤 雅知	文	史				三浦 愛香	外C		貞包 英之	社	現	社会科学系							
運営センター 委員	金子 明雄	文	文				シュロスブリー 美樹	外C		大橋 健一	観	交	社会科学系							
	荒川 章義	済	済				マッキロイ タラ	外C		奇 正 彦	ス	ス	スポーツ人間科学系							
	花井 亮	理	生命				上野 育子	外C	全カリサポーター											
	砂川 浩慶	社	メ社				町 沙恵子	外C												
	東條 吉純	法	国ビ				マーティン ロン R.	異					異							
	松村 公明	観	交				森 聡美	異					異							
	湯澤 直美	福	福		コミュニティ福祉 学部長		小山 亘	異					異							
	山口 和範	営	営				主任	坂本 真一					外C	学部 選出	唐澤 一友	文	文	人文科学系		
	大石 幸二	現	心		現代心理学部長		ドイツ語	牛山 さおり					外C		米谷 健司	済	会	社会科学系		
	丸山 千歌	異	異		異文化 コミュニケーション学部長		フランス語	主任					関 未玲		外C	佐藤 信哉	理	数	自然科学系	
	沼澤 秀雄	ス	ス	スポーツウェルネス 学部長				河野 美奈子					外C		太田麻希子	社	現文	社会科学系		
	関 未玲	外C		外国語教育研究 センター長				石川 文也					異		異	川島 享祐 (春学期まで)	法	法	社会科学系	
松下 信之	理	化	教務部長			小倉 和子	異	異					孫 斉庸 (秋学期から)		法	政	社会科学系			
言語系科目構想・運営チーム						スペイン語	主任	泉水 浩隆					外C		石井 正子	異	異	人文科学系		
リーダー	松本 句子	外国語教育研究センター						松本 句子	外C	千住 一	観	交	社会科学系							
メンバー	サンブソン リチャード J.			英語				中国語	主任	森平 崇文	外C	藤井 誠一郎	福		コ政	社会科学系				
	坂本 真一			ドイツ語						南雲 大悟	外C	篠崎 誠	現		映	人文科学系				
	関 未玲			フランス語						細井 尚子	異	異	安松 幹展		ス	ス	スポーツ人間科学系			
	泉水 浩隆			スペイン語						主任	佐々木 正徳	外C	総長 任命		佐々木 正徳	外C	社会科学系			
	森平 崇文			中国語							朝鮮語	主任	金 恩愛	外C	※3 サポートグループ 人文科学系サポートグループ 社会科学系サポートグループ 自然科学系サポートグループ スポーツ人間科学系サポートグループ					
	佐々木 正徳			朝鮮語									ロシア語	主任			松本 句子	外C		
	松本 句子 ^{※1}			ロシア語 ^{※2}													諸言語	主任	松本 句子	外C
	松本 句子 ^{※1}			諸言語															森平 崇文	外C

※1 言語チームリーダーとの兼務
※2 2023年度より新設

全カリニュースレター No.55
 発行 2023.6.23
 発行人 浅妻 章如
 編集人 飯島 寛之、松本 句子
 発行所 立教大学 全学共通カリキュラム運営センター